東京都の文化施策を語る会（第６回）議事要旨

１　日　時　　平成17年9月21日（水）　午後2:00～午後3:30

２　場　所　　都庁第一本庁舎7階　中会議室

３　出席者　　福原座長、今村委員、岡本委員、平田委員、太下専門委員、
　　石原知事

４　次　第

（１）開会

（２）資料確認

（３）意見交換

５　発言要旨

○山本文化振興部長

ただいまより、第６回「東京都の文化施策を語る会」を開催させていただきます。

本日は、お忙しいところをご出席いただきましてありがとうございます。委員の出欠についてですが、柏木委員は所用のためご欠席となっております。また、本日は、知事にご出席をいただいております。

初めに資料のご説明をいたします。今回の資料は、「都の文化施策の方向性について」でございます。左側に、都の文化政策の目標と対応について３点の方向性を示しております。右側は、その方向性を具体化した施策のイメージでございます。

それでは、これより先は、福原座長に進行をお願いいたします。

○福原座長

今年の２月に第１回の語る会を開催いたしまして、今回で６回目でございます。皆様には大変ご苦労をおかけしております。

また、本日は知事にご出席いただいており、後ほどご意見をいただきます。

さて、これまで東京都の文化施策を語る会で議論されたこと、また、今後の論点について「中間のまとめ」に列挙いたしました。これは太下専門委員を中心にまとめていただいたものです。その概略として、例えば、都市の活性化とは都市の文化力によるものであり、それがひいては国の文化力となり、アジアの文化発信源や世界からのあこがれになるであろうということ。また、次世代を担う子どもたちには、芸術文化環

境を整備しなければいけないこと。さらに、指定管理者制度がスタートするのを機に、文化政策の足を引っ張ることになく、役立つ制度になるようにいろいろと考えなければいけないこと。それらのテーマについて、これまでもろもろ話し合いました。今後は、年内にあと５回程度の語る会を開催し、具体的なものを結論としてご提案しようと考えております。

では、まず知事から東京の文化についてお話をいただきたいと思います。

○石原都知事

委員の方々には、いろいろお世話になっております。

さて、文化政策というのは一種のコーディネーションで、思いつきです。東京は、ソフトもハードも、いろいろなポテンシャルがあるのに、そういうものをピックアップする発想が、あるようで、ない。

私がこの数年間に、経験してきたことをご参考に話しますと、例えば、庁舎から反対側にある議会に向かう回廊には、非常にいいスペースの壁があるんですが、なぜここに絵をかけないのかなと思いました。そこで、東京のコンテンポラリーな若い人たちの絵を公募し、現代美術館で審査・展示をしたあと、その壁に１２人の入賞者の作品を月ごとにかけることにしました。このごろは点数が増えて、千点を超える作品が集まるようになってきましたし、水準もだんだん上がってきています。

しかし、何としても拠点がない。東京はあちこちに資産を持っているけど、つまらないことに使ったり、物置みたいになっていた。幾つか探して、順天堂病院の裏に、昭和初期の３階建てのなかなか由緒のある建物がありました。そこで、「ワンダーサイト」と称して、今村さんに館長になってもらっていろいろなイベントをするようになりました。これは非常に評判になって、識者の世界では、日本の代表的な窓口になっている。それで自信を得て、渋谷にも次のものをつくり、先日オープンしました。

もう一つの例では、私の執務室の入口に、めったに人が入って来ないところに、イサム・ノグチやジャン・アルプのすばらしい作品があったのですが、こんなところに置くなと言ったんです。そこで、第一庁舎と第二庁舎を結ぶ渡り廊下の真ん中にイサムさんの作品を据えました。アルプの作品は、ちょうど合う壁があって、これはアルプのためにつくったような場所で、本当にピシャッとおさまる。つまり、ひらめきと思いつきとコーディネーションの問題なのです。

文化といってもいろいろなものがあり、コンセプトも変わってきた。例えば、４つあった大学を統合して発足した首都大学東京でも、私が念願しているのは、公共デザインも含めたバウハウスのようなものです。バウハウスはメッサーシュミットなんかもデザインしたんですが、ああいうものまでやるインスティテュートのようなものを、首都大学でもどこでもいいですが、つくりたいなと思っています。

それから、福原さんに写真美術館を手伝ってもらって本当にうまくいっていますが、以前、写真美術館がどこにあるのかわからないから看板を出せと言ったら、恵比寿の駅前に白い看板を立てて、そこに赤い字で「写真美術館はこの先」と書いた。たまげたね。もち屋はもち屋だから、福原さんがやって写真美術館の存在感が人に伝わるようになってきた。現代美術館のほうも、経営者を据えなければだめだというので、今は昔から知っているＮＴＶの氏家さんに頼んでいます。

この間、台湾に行きました。台湾は芸術関係で存在感を示そうと、都心に近いビルを開放して、アーティストのビレッジをやっていた。これは前から考えていて、東京の真ん中にガラ空きの国連大学の施設があって、すぐに利用しようと思っています。やはり台北に比べたら東京のほうが刺激的だし、いろいろな文化が混交しています。

ということで、あるものをいかに活用するかです。東京が持っているいろいろなソフト、ハード、インフラを引っ張りだして、くっつけて、ものにしていくというスタンスで、東京の文化政策をお考えいただき、知恵を出していただきたい。

○福原座長

ありがとうございました。幾つか発想を挙げていただいたのですが、要するに、我々が持っている公的・私的な文化資源をどうくっつけるかというようなこと、もう一つは、バウハウスのような新しいムーブメントになるような、ダイナミックな仕事が東京でできるはずなので、皆さんに知恵を出していただきたいと思っております。もちろん、ビジュアルな絵画とか彫刻ばかりではなくて、演劇も映画も音楽もあるし、いろいろなジャンルで今のようなことが発想できるのではないかと思います。

○岡本委員

私は観光振興の立場から委員になっていますので、その立場から申し上げますと、観光地として人気があるところは、そこの通りを歩いたときの居心地のよさ、あるいは、見え方に審美的な秩序がある。

ニューヨークに行くたびにうらやましいと思うのは、通りごとに、まちごとに固有の景観があり、なかなか魅力的で、空間快適性がある。私は、景観というのは、文化表象といいますか、その地域の文化が形になっていると思います。そういう意味で、東京というのは、大変魅力的なまちだけれども、景観としてもう一つ魅力や居心地のよさに欠けている。例えば、今、秋葉原が非常に活性化していますけれども、秋葉原にふさわしい景観があるのではないかと感じています。

そこで、地域ごとに、地域の人が景観に対してどういう思いを持っているかということを引き出すような仕組みづくりも必要だと思います。東京でも、例えばコリアンタウンとか、いろいろな異質の空間ができており、大都市の魅力は、そういう多様性にあると思います。ですから、そのような多様性の一つ一つを、もっと文化的な魅力を持つ方向に誘導していただくことを提案します。

○今村委員

文化というものが、一つの劇場とかコンテンツではなくて、まちと関係してこなければいけないというのは、私も重要な視点だと思います。

東京は、コンテンポラリーアートだけでなく、デザイン、ＩＴ産業、パフォーマンス、音楽などさまざまな分野ですごいポテンシャルを持っている。しかし、今、東京は何が弱いかというと、それらをネットワークし、コーディネーションしていく力がないことです。バウハウスには、演劇、絵画、建築の人もいましたので、そのバウハウスがネットワークとしての旗印になればいいと思います。

もう１点は、実験的なパフォーマンスダンスや演劇、現代音楽も含めてフレキシブルな劇場が求められていることです。ワンダーサイトで音楽をやっていますが、使い勝手がよくて、キャパシティがそこそこで、新しい実験的なこともできる場所が、実は東京には非常に少ないと思っています。

○平田委員

劇場というのは、ものをつくる場所ですが、東京芸術劇場にはつくるという機能がありません。ウィーンのオペラ座にしろ、ミラノのスカラ座にしろ、都市の名前が必ずつきますが、東京の場合は、そう呼ばれる劇場がなくて、これは恥ずかしいことです。東京規模の都市であれば、やはり劇団とバレエ団ぐらいは、こういう時代ですから必ずしも直営で抱えなくても、何かつくるという機能が必要ではないかと思います。

もう一つは、アジアのアートセンターとしての機能を東京は持つべきです。それは、アーティストが集まってくるだけではなく、まちが急速に多国籍化していくことへの対応です。治安とか安全対策には知事が一番力を注いでくださっていますが、芸術文化のソフトの面でそれをフォローして重層性を持たせることも必要です。そして、その中核になるのは、劇場や芸術監督が司令塔となるべきだと思っていますので、この委員会で具体的な提言をしていきたいと考えております。

○福原座長

かなり本質的なことをご提案していただきましたが、映画、音楽のことでご意見があればお願いします。

○平田委員

専門ではないのでわからないのですが、いわゆるマンガとかアニメとかまで含めた東京のソフトパワーは、韓国や東南アジアの人々にとってあこがれであり、逆に言えば、それがなかったら本当に反日感情が爆発してしまう。

映画は、特に東京では撮影しやすくしていただいて大変ありがたいと思いますが、東京のイメージはまだまだ弱い。例えば、北海道の富良野には中国からの観光客がたくさん行きますが、これはほとんどがドラマとか映画を見て、その風景を見たいというだけで行きます。そういうところが東京にはまだ少ない。まちのイメージとは、まさに岡本さんがおっしゃられたような景観にも結びつくと思います。そういう意味でも、映画などで東京のイメージを訴えていく意味は大きいのではないでしょうか。

○太下専門委員

私も、先ほど知事から話のありましたバウハウスのような教育機関が必要だと思います。当時のバウハウスは、ドイツ国内だけでなく、ロシア、フランスなどヨーロッパから優れた人たちが集まっていました。東京でつくられる機関についても、アジアの優秀なアーティストやデザイナーが集まるものにしていただきたいと思います。

また、そういうネットワークができると、日本のアーティストも海外に行きやすくなると思いますし、また、その前段階で、東京にもっとアーティストが気安く来ることができる態勢があっていいと思います。アーティストは一般にお金がないと言われていますが、例えばアジアのアーティストが貧乏旅行で東京に行きたいと思った時に、東京都が通訳ボランティアを紹介して、例えば秋葉原を案内するとか、そんな対応が

あるだけでも、東京に対するイメージは、だいぶ違ってくると思います。

お隣の国韓国では、今、国を挙げて文化振興をやっています。今年の目玉事業が「アジアン・パートナーシップ・プログラム」ということで、アジア諸国を対象に、何年間かかけて合計1,000名のアーティスト等を韓国内に招待して、研修を受けて帰ってもらうプログラムをやろうとしています。多分、日本は国としてそういう動きができないと思うので、逆に東京都が東京を舞台にやっていただきたいと思います。

○福原座長

太下さんが言われたことを総合すると、いろいろな運動はやっているけど、東京の存在感が見えないということですね。まさに今おっしゃったように、国でやれないから東京都でやれと。同じことは、出雲や松江、また金沢でも、日本ではやれないからローカルでやって発信し、それが日本のイメージになっている。それを東京でやることができないことはない。その知恵をこれからみんなで集めたいと思います。

○石原都知事

ただ、金沢とか松江はかなりキャラクターや地域性の強いまちですよ。そういうものが東京にはファクターとしてない。だから、岡本さんのお話に関連があるんですが、鎌倉の宣伝を東京でやれと言っています。鎌倉は日本の三大古都の一つですし、東京に来ている観光客は１時間で行って帰えることができる。

○福原座長

東京には、アニメとかマンガ、ビデオゲーム、そういったものが集積しており、これは売りになるわけですね。

○石原都知事

それはそうです。ついでに申し上げますと、『新東京百景』みたいなものを設定すると、新しい観光の材料になると思う。例えば、私はレインボーブリッジが好きで、そこから見るとまさにマンハッタンですよ。逆に、あの橋の上に若い恋人が２人でいる場面を船の上からズームで引いて映したりすると、情景的にはかなりいいカットになると思います。とにかく、今の新しい東京ならではのものですね。

○岡本委員

観光の分野で言うと、昔は「見る」ということですけど、今は、においをかいだり、手でさわってみたり、五感で対象を味わうという時代です。ウォーキング・フォー・

プレジャーといいましょうか。私は、空間快適性のある通りであるとか、景観の見え方に魅力があるところを、知事がおっしゃるように選定して、それを売り出すことは非常に効果的ではないかと思います。

○福原座長

今、上海の芸術家村には、世界中の美術館のキュレーターが、掘り出しの作家がいないかということでいつも来ています。そのような小さな地域をつくることはできるわけです。

○石原都知事

ワンダーサイトでも、あそこから誕生した何人かの作家が、ビエンナーレで買い手がついて流通に乗って、画商が集めたりしていますよね。

○今村委員

私も上海に行ってきました。その時の議論では、やはり美術館の役割というのは、若手を育てたり、ステータスを与えたりするシステムづくりが必要だということです。

アーティスト・イン・レジデンスでも、ワンダーサイトで来年進めようとしているのは、東京をテーマに、海外からアーティストを招いて一緒に共同作業をすることです。これは平田さんがアジアの演劇人たちとやってきたことですけど、呼ぶだけではなくて、一緒にプロダクションをつくっていく、その作業がすごく重要だと思います。

また、アーティストにこだわることなく、レジデンスとしてさまざまな研究者、製作者、プロデューサーなどを呼んで、領域も超える形で一緒にプロダクションすべきだと考えます。

○福原座長

海外との交流ですが、写真美術館にも、外国の美術館長とかが突然来ます。これは非常に難しいところがありまして、おいでになっても、きちんと応接する人がいない。

他にも、展覧会には、英語のキャプションがついているものと、ついていないものがあります。キャプションをつけるのは、費用の面でも、時間の面でも大変なことですが、外国人が３％とか４％になったときには、どうしてもやらないといけない。英語をつけると、今度は、韓国語はどうなるのか、となってくる。最低、アジアの人たちは何かの言葉でわかるようにしなければいけないというのが私の考えです。

○石原都知事

平田さん、下北沢あたりで、群小の劇団がありますが、育ってくるものの比率はどれくらいですか。どうも、もう一つ情報が足りないですよね。

○平田委員

３％ぐらいですね。情報が足りないこともありますが、やはり場所が足りない。そして、選ぶ人間もいない。

欧米の場合、特にヨーロッパの場合、若手や作品の支援は全部劇場に任せます。フランスでは、20代後半で芸術監督になりますから、２億円ぐらいの予算を持って、その芸術監督がさらに若い世代を選抜する。その芸術監督が適当なお金の使い方をしたら、１年、２年でクビにするというシステムになっています。

日本では、行政の支援は総花的になるし、実績がある者を選ぶこととなり、面白味のない支援になってしまうので、やはり劇場を中心にやるしかないと思います。

○今村委員

今の話は、美術なども全く同じです。今までは、画廊という小さなところと美術館しかなかったわけです。ワンダーサイトがやっているのは、その中間の施設です。アジアでは、オルタナティブスペースと呼ばれている中間の施設がダーッとできてきました。商業的な美術館でも、小さい画廊でもない場をつくる動きが出ており、そこから美術館や画廊に人材を供給していくというスタイルをとってきています。

○福原座長

最後に話題提供ですが、日本航空で出している『アゴラ』という雑誌に、「パリ文化力ツアー」という記事がありました。どういうことかというと、フランスの中のいろいろな都市が文化政策に力を入れ始めて、今、ＥＵ内では移動が自由ですから、ナントに行ったり、リールやアビーネに行き始めた。そのツアーに参加して、美術館や博物館の人たちの話を聞くのです。東京もいつの日か、「東京文化力ツアー」がやれるようになればと思います。

本日は、知事のお話も伺いましたので、これから先のまとめに参考にしていきたいと考えております。

○山本文化振興部長

それでは、これで第６回「東京都の文化施策を語る会」を終了させていただきます。本日はありがとうございました。